

おんし 恩師の急死

はやさかふみ お　　くろさわあきら　　くろさわさくひん
早坂文雄は黒沢明とは親友で、黒沢作品の『生きる』や『七
人の侍』などの音楽を手掛けていました。勝は早坂先生につ
いて飛び回りながら何本かの作品の音楽を引き受けていまし
た。

はやさか
早坂先生からは「あまりつまらない仕事はやめろ。筆がす
さぶ(※51)」と常日頃から諭されました。

※51 すさぶ

たいど
気持ちや生活態度にゆとりやうるおいがなくなること。

また、『ゴジラの逆襲』の時は「やるからには今までの伊
福部さん(※52)のような音楽ではなく、子どもたちが喜ぶよ
うな、ゴジラに親近感(※53)を覚えるような音楽をつくれ。」
『鞍馬天狗』の時は「佐藤でなければできない最高の音楽
をつくれ。」など一つ一つアドバイスを受けていました。

昭和 30 年(1955)10 月 15 日突然早坂が亡くなります。
黒沢明監督の『生きものの記録』の工作中、病状が
悪化し、亡くなってしまったのです。勝も別な仕事の最中で
したが、すぐにお宅へかけつけました。奥様は突然のことに
おろおろするばかりです。

※52 伊福部さん

伊福部 昭、日本を代表する作曲家の一人。

※53 親近感

親しみやすい感じ。

まさる そうぎ だんど れいぜん な
勝は、葬儀の段取りをつけて、霊前(※54)で泣きながら作曲をしました。

くろさわかんたく はやさか とつぜん なげ
黒沢監督は早坂の突然の死を嘆き悲しみ、『生きものの記録』の撮影も手につかなくなり、黒沢組の撮影は一時中止となりました。

しかし、音楽をどうしようかということになり早坂の遺稿(※55)を調べると、メインテーマのデッサンと、ピアノの譜面(※55)に書きかけのデッサンが四小節だけ残っていました。それを元に勝が続きを引き受けることになります。

※54 霊前

死んだ人を敬って、その霊前を言うことば。

※55 遺稿

亡くなった人の生きていた時の書物や日記などをまとめたもの。

むづか
難 しい仕事でしたが何とかやり遂げ、クレジットタイトルに
はやさかふみ お いさく
「早坂文雄遺作」(※56) の文字を見たときは 涙 があふれて止
まらなかつたそうです。

えん くろさわかんたく
これが縁で黒沢監督と仕事をするようになります。



生きる
生きものの記録のポスター

いさく
※56 遺作

しぼう のこ
死亡した人が残した文学や音楽などの作品。